

その後、埼玉県副知事、女性初の総領事（オーストラリア・ブリスベン）などを経て、07年に昭和女子大学学長に就任した。1946年生まれの坂東氏は、公私ともに団塊世代と身近に接してきた人物である。

団塊世代の男性が今後の生き方を考える時、認識しておかなければならない大前提がふたつあります。

ひとつは、会社に対する帰属感が強い時代に第一線の社会人として生きてきたということ。

当時は、高校や大学には十分な社会人教育を施す機能がまだなく、会社で職業人、社会人として教育され、鍛えられ、成長した。

自分が目指す師も、志を同じくする同志も、



その時、新しい自前のネットワーク、自前の人間関係を築けるかどうかで、第2の人生には大きな「格差」が出てしまうのです。

もうひとつの前提は、「国内移民」だということです。団塊世代には地方出身者が多く、高度経済成長期に大都市圏に進学、就職し、自分が家族を持った時に、大都市周辺の新興住宅街に家を構えました。そこには古くからの地域社会がなく、古き良き習慣がなかった。

そして、団塊世代もまた、古き良き習慣を子供たちに伝えず、伸び伸びと子育てをした。結果、成人した子供ができて、結婚して子供ができて、実家に帰らなくなりました。親の世代のような2世代、3世代同居ではなく、終の棲家は「エンブティ・ネスト」（空っぽの巣）。

同世代の夫婦だけで年老いていくわけですから。今後は夫婦で過ごす時間が多くなる。それをどうするかにより、円満な老後を

### 趣味に生きるより社会起業

では、団塊世代のあらまほしき「品格」のある生き方とはどのようなものでしょうか。順に説明していきます。

#### ●「会社離れ」せよ

まず、親離れ、子離れならぬ「会社離れ」が必要で。中には、自己評価より実際のポストが低いまま会社生活を終え、「オレがなすべきだったポストに、なぜあいつが……」と、恨みに似た思いを抱いている人がいます。そうしたネガティブな感情は第2の人生にとってマイナスです。

退職した会社との人間関係は「ソフトネットワーク」に切り替えるべきです。元同僚と頻りに会ったり、退職者向けの組織や施設に足繁く通うのはよくありません。週に1回から2週に1

送れる人もいれば、熟年離婚の憂き目に遭う人も出てくるのです。だからこそ、奥さんに対する「ありがとう」が大切なのです。

回、そして月に1回へと少しずつ遠ざかっていくのです。会った際も、会社を懐かしむばかりでなく、自分の第2の人生を語るようにしたいものです。

#### ●60代は趣味に生きるな

人生はまだあと20年ほどは続くでしょうし、体力もそれなりに残っている。ならば、少なくとも60代は社会的に現役のつもりで生き、趣味に生きるのには10年以上先にするべきです。

05年9月に、残間里江子さんが『それでいいのか蕎麦打ち男』（新潮社刊）という本を出し、定年退職を迎えると趣味に生きる団塊の世代が多いことに対し、「社会的にもうひと旗揚げしよう」とハッパを掛けました。が、私も同意見です。

れ、といわれると、囑託、契約社員などとして再就職したり、NPO（非営利組織）やボランティア活動をすることを考える人が多いかもしれません。しかし、単に再就職するだけでは「ハードネットワーク」の世界に逆戻りするだけです。また、NPOは会費だけで運営しているところが多く、活動が長続きしにくいという欠点がある。

そこで私が提案したいのは、サラリーマン時代の能力と経験を生かし、ある程度の収入を確保するような方策を考えながら、会社と関わっていく生き方なのだと思います。

#### ●社会起業家を目指せ

具体的には、「社会起業家」を目指してほしいと思います。

ヤマト運輸の故・小倉昌男元会長は格好のモデルといえます。小倉さんは引退後、「スワン」という会社を設立しました。全国展開している「スワンカフェ」「スワンペーカーリー」を運営する会社ですが、多くの

障害者が働いています。既存の福祉関係団体にはない経営ノウハウを導入し、それまで低賃金を余儀なくされていた障害者にまともな賃金を支払い、しかも事業の採算も成り立っている。

もいい。自分の専門外だからと躊躇する人もいるでしょうが、実は今、そうした事業に着手しながら、経営がうまくいっていない会社がたくさんあります。そこで、団塊世代が会社で培ってきた営業、マネジメント、マーケティング、経理などの経験を生かしてほしいのです。起業家として、あるいは社員として関わる余地は十分にあります。

## 大学院で若い世代と知り合う

### ●地域の若者と関われ

団塊世代の能力は他の分野でも求められています。大企業と違い、地域の中小企業や協同組合で働く若者には、研修を受ける機会があまりありません。そのため各自自治体は、若者に研修を施す場を設け、地域内で「社会起業家」を養成しようという試みを進めているのですが、目下の悩みは講師が不足していることだといえます。団塊世代には、若者たちに会社で磨いたスキルを教える役割を担って

ほしいのです。また、「社会的孫育て」にも関わっていただきたいと思えます。地域の学童保育に関わったり、子どものための塾を開くのです。

こうしたことの利点は、夫婦2人暮らしとなった団塊世代が、子供世代、孫世代と関わりを持つことです。しかも、地域で活動するので、日常的な人間関係を持てるのです。

### ●貯蓄より「貯人」

年金の財源問題が世間を騒がしていますが、幸いに

も団塊世代は普通に生活できるといわれます。ならば、貯蓄の心配ばかりせず、自分のためにお金を使うべきでしょう。

お勧めしたいのが大学院の社会人枠への入学。学費も年間数十万円、授業も週に数コマです。新しい道も開けるし、若い世代とも知り合える。団塊世代よ、大学に戻れ——です。

### ●生活技術を身につけよ

私がオーストラリアにいた時、魅力的な日本人女性がよく現地の男性と結婚しました。表面的な親切かもしれませんが、椅子を引いてくれる、コートをかけてくれるといったことが女性には嬉しいのです。それは歳を取っても変わりません。歳を取れば取るほど、奥

さんに対しては批判ではなく感謝。熟年離婚を避けるためのおまじないだと思っ、1日10回は「ありがとう」といってください。

さらに大事なことは、日常の炊事、洗濯、掃除など生活技術を身につけること。最良の講師は同じ家の中にいます。それが奥さんの負担を軽くしますし、万が一自分がひとりになった時の備えにもなるのです。

### ●ヒラリーもオバマも「団塊世代」

米国の団塊世代「ベビーブーマー」は、46〜64年に生まれた7800万人。第1世代（46〜54年）と第2世代（55〜64年）に分けられる。民主党の大統領候補指名争いを続けるヒラリー・クリントン（47年生まれ）は第1世代、バラク・オバマ（61年生まれ）は第2世代となっている。

2008.4.11 週刊ポスト